

氏名	掛谷誠
	かけ や まこと
学位の種類	理学博士
学位記番号	論理博第606号
学位授与の日付	昭和53年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	Subsistence Ecology of the Tongwe, Tanzania (タンザニア国, トングウェ族の生計生態学)

論文調査委員 (主査) 教授 池田次郎 教授 日高敏隆 教授 河合雅雄

論文内容の要旨

本論文は、東アフリカ、タンザニア国西部に住む焼畑農耕民トングウェ族を対象とした生態人類学的な研究報告で、乾燥疎開林帯における生業活動と適応の実態を記載し分析したものである。

まず、この地域の地形・気候・植生・動物相についての詳細な記載がおこなわれ、アフリカ大陸におけるその位置づけと特性が画き上げられている。約2万km²に及ぶトングウェ・テリトリーは、ツェツェバエのために畜牛の飼育には不適で、その大半を占める植生型である乾燥疎開林は農耕の適地ではない。そのため人口密度は0.73人/km²と極度に低い。トングウェ族はこの原野の中に疎開して5～30人程度の小集落を構え、自然に強く依存した生計を営んでいる。申請者は、それぞれ低地帯、中高度地帯、高地帯に位置する環境条件の異なる4集落を選んで、その自給自足的な食生活について、生産・獲得と消費、さらに食物をめぐる社会関係の分析を主題にして調査を進めた。

トングウェ族は、主食であるトウモロコシ・キャッサバの焼畑農耕を軸としながら、その他の作物の栽培、狩猟、漁撈、蜂蜜採集などによって副食を得ている。この食物生産ならびに獲得に見られる顕著な傾向は、できるだけ少ない努力によって生計を維持してゆこうとする最小努力の傾向性であった。さらに注目すべきことは、頻繁な集落間の往来によって、食物は集落間で平均化されているという実態であった。高地のわずか7人からなる集落における調査結果からすると、その総食物消費量のうち実に40%が、来訪者によって消費されていた。このほか、集落間の食物の相互扶助の例も頻繁に見られ、食物はたえず集落間で平均化されていることが明らかにされた。

この最小努力と平均化という二つの傾向性は、相互に密接な関係をなしており、このこと自体が、彼らの貧困な生活環境と低人口密度に対する適応の重要なポイントになっている。そして、この傾向性の維持こそが彼らのサブシステム・エコロジーの支えであると同時に、彼らの道徳律の基底をもなしており、彼らの超自然的世界と深いかわりあいをもっていることが明らかにされた。

論文審査の結果の要旨

申請論文は、西部タンザニアの焼畑農耕民トングウェ族の自然への働きかけを、生業活動という視点から精密に分析しながら、その社会関係、精神的世界等の上部構造を理解するための基盤を求めようとしたものである。申請者は、まず環境条件の異なる4集落を選択して分析を進め、この部族間の生業活動のヴァリエーションを把握することに成功している。乾燥疎開林帯における生態人類学的な研究がこれまでになかっただけに、この報告は、アフリカにおけるヒトの生活様式の類型を捉えたものとしても高い評価を与えることができる。

申請者は、これら集落における食生活をその自給自足的な生計維持機構の表現と見なして、食物生産・獲得と消費、食物をめぐる社会関係について量的な分析をおこない、身近な環境において最も少ない努力で生計を維持してゆこうとする傾向性と、集落間の往来や相互扶助システムによって集落間で食物の消費を平均化してゆこうとする傾向性があることを見いだした。これによって、トングウェ族の乾燥疎開林という貧困な環境ならびに低人口密度への適応と、さらにこの部族に独特な諸種の社会慣習の理解に迫ろうとしている点は、独創的であり興味深い。とくに上記の二つの傾向性がこの部族の道徳律の基盤をなしており、参考論文にも示されている彼らの多彩な超自然的な世界が、そのサブシステム・エコロジーの機構に深く根ざしているという指摘をおこなったが、それはこの社会の上部構造を理解する上できわめて重要な意味をもっている。

以上、トングウェ族の生業全般についての精細な分析を通じて、乾燥疎開林という苛酷な生活環境への稀薄なポピュレーションの適応の実態とその特異性を画き出し、アフリカにおけるいまだに自然に強く依存している生活様式の実態を示しながら、生態と社会との接点の理解に一つの道を開いた申請者の業績は高く評価することができる。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。